

令和6年産水稻の作況調査結果と当面の技術対策

米麦畜産課
(農産振興室)

生育ステージ	早期：収穫終了 早植：収穫期～収穫終了 普通期：成熟期～収穫期
生育概況	早期：「コシヒカリ」の成熟期は平年より4日早まった。収量は平年並～やや少なく、品質は白未熟粒や胴割粒の発生で平年より劣る。 早植：「コシヒカリ」「ひとめぼれ」の成熟期は平年より2～7日程度早まった。収量は平年並～やや少ない見込みで、品質は白未熟粒や斑点米カメムシによる被害粒により、平年並～やや劣る。 普通期：「あさひの夢」の成熟期は平年並～5日程度早まった。収量は平年並みの見込みで、白未熟粒等による品質低下が見られるが、早植栽培よりも被害は少ない。

1 気象経過（前橋地方気象台の気象データ、10月は第3半旬までのデータ、参考資料参照）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
気温(平年差)	+3.2℃	+0.9℃	+1.4℃	+2.6℃	+2.3℃	+3.4℃	+2.3℃
降水量(平年比)	98%	106%	114%	74%	110%	103%	100%
日照時間(平年比)	87%	109%	139%	116%	114%	109%	104%

2 生育概況

(1) 概要

ア 早期・早植栽培（6月15日以前の田植）

早期栽培「コシヒカリ」の成熟期は平年より4日程度早まった。収量は平年並～やや少ない傾向で、不稔粒、屑米がやや多い。品質は出穂後の高温等の影響で白未熟粒や胴割粒が見られ、平年より劣る。

早植栽培「コシヒカリ」「ひとめぼれ」の成熟期は平年より2～7日程度早く、中山間地域は早い傾向となっている。「あさひの夢」の成熟期は地域差があり、平年並～6日程度早まった。9月から10月前半にかけて降雨日が多く、刈り遅れたほ場や一部倒伏しているほ場が見られる。収量は平年並からやや少ない見込み。品質は出穂後の高温による白未熟粒や斑点米カメムシ類による被害米が見られ、平年並からやや劣り、等級は中山間地域で1～2等、平坦地域で2等が中心となる見込み。

イ 普通期栽培（6月16日以降の田植）

高温傾向から生育は前進していたが、9月中旬以降の曇天による気温の低下に伴い、「あさひの夢」の成熟期は平年並～5日早まる程度となった。収量は地域差があるが全体では平年並を見込む。高温による白未熟粒は見られるものの、早期・早植栽培に比べ発生程度は少ない。

(2) 病害虫・障害等の発生状況

紋枯病が多く、被害の大きいほ場では上位葉まで進展がみられ、紋枯病由来の出すくみや倒伏も見られた。普通期栽培では、出穂期の降雨によりもみ枯細菌病が広範囲で見られた。全域で内穎褐変病、斑点米カメムシ類がやや多く、東毛の一部地域ではイネカメムシによる被害粒が多く見られている。登熟期の降雨により倒伏しているほ場が散見される。

早期・早植栽培では、出穂期以降の高温の影響で白未熟粒、胴割粒の発生が多くなっている。

(3) 作況ほ等の調査結果等

ア 作況ほの調査結果（表 1 参照）

県平均の出穂期は 8 月 12 日（平均比-2 日）であった。出穂後 30 日の穂重は 710g/m²（同 105%）であった。早期・早植栽培の成熟期は 9 月 16 日（同-5 日）、普通期栽培の成熟期は 10 月 11 日（同-3 日）であった。

イ 農業技術センターの生育基本調査結果

(ア) 稲麦研究センター（6 月 23 日移植）

「あさひの夢」の出穂期は 8 月 27 日（過去 10 カ年平均比-4 日）、成熟期は 10 月 9 日（同-10 日）、稈長は 79cm（同 102%）、穂長は 22.1cm（同 106%）、穂数は 303 本/m²（同 77%）であった。

(イ) 東部地域研究センター（6 月 4 日移植）

「あさひの夢」の出穂期は 8 月 16 日（平均比※ -2 日）、成熟期は 9 月 23 日（同-7 日）、稈長は 77cm（同 100%）、穂長は 20.8cm（同 101%）、穂数は 333 本/m²（同 95%）、m²玄米重は 480g/m²（同 96%）であった。

※東部地域研究センターの平年値は、奨励品種決定調査（早植）過去 10 ヶ年の平均値を平年値とする。

ただし、穂数、m²玄米重は過去 4 年の平均値。

表 1 水稲作況ほ調査結果（地域別・作期別）（ ）内は平年比

調査項目 地区	移植期 月/日	出穂期	出穂後 15 日		出穂後 30 日 穂重	成熟期
		月/日	穂数 /m ²	籾数 /m ²	g/m ²	月/日
県	6/6(0)	8/12(-2)	387(101)	29,775 (99)	710(105)	9/25(-4)
中 部	6/15(0)	8/17(-3)	408(109)	33,898(109)	698(105)	10/1(-3)
西 部	6/11(0)	8/14(-2)	397(104)	32,490 (97)	743 (99)	9/27(-3)
北 部	5/22(+1)	8/3(-2)	368 (92)	24,092 (90)	733(110)	9/17(-6)
東 部	6/16(-3)	8/24(-2)	339(100)	25,147 (94)	598 (92)	10/2(-6)
早期・早植	5/28(0)	8/4(-3)	378 (97)	27,689(100)	740(112)	9/16(-5)
普通期	6/21(-1)	8/26(-2)	401(109)	33,111 (97)	657 (94)	10/11(-3)

- 1) 県、地区、作期別の平均値はいずれも算術平均とした。
- 2) 移植期欄の()内の「-」は早い、「+」は遅いを示す。
- 3) 早期・早植：6 月 15 日以前の田植。普通期：6 月 16 日以降の田植。
- 4) 桐生市は担当農家変更のため、県、地区、作型平均から除外した。
- 5) 館林市は移植時期が大幅に遅れたため、県、地区、作型平均から除外した。

(4) 作柄のまとめ（表 2）

各地域の作柄は、「並」であり、県全体では「並」が見込まれる。

表2 地帯別作柄概況 () 内は農畜産課・地区農業指導センター

地域別	作柄	概 況
中 部 (中部) (渋川) (伊勢崎)	並	・早植栽培：収穫終期。8月下旬以降曇雨天が多かったものの、前進傾向は変わらず生育は3～7日程度早い。降雨により一部収穫ができていない。白未熟粒は見られるが、昨年よりは少なく平年並み。コシヒカリでは部分倒伏が散見される(渋川)。 ・普通期栽培：成熟期～収穫期。成熟期は2～3日程度早まった。もみ枯細菌病、紋枯病が多い。
西 部 (西部) (藤岡) (富岡)	並	・早植栽培：収穫終期。成熟期は2～6日早まった。高温による白未熟粒が多い(西部)。天候不順による全体的に刈り遅れ傾向(富岡)。 ・普通期栽培：成熟期～収穫期。成熟期は2～5日程度早まった。もみ枯細菌病、紋枯病、内穎褐変病が散見され、紋枯病による倒伏も見られる(藤岡)。
北 部 (吾妻) (利根 沼田)	並	・早植栽培：収穫終期。成熟期は4～9日程度早まった。収量は平年並～やや少ない。品質は斑点米カメムシ類による被害粒、白未熟粒、胴割粒などから平年よりやや劣る。断続的な降雨で収穫の遅れや倒伏が散見される。
東 部 (東部) (桐生) (館林)	並	・早期栽培：収穫終了。成熟期は4日程度早まった。収量は平年並～やや少なく、高温による白未熟粒等が多く平年より劣る(館林)。 ・早植栽培：収穫終期。成熟期は平年並～6日程度早まった。高温による白未熟粒や斑点米カメムシ類による被害米が平年より多い。降雨により収穫が遅れている(館林)。 ・普通期栽培：黄熟期～収穫期。成熟期は平年並～6日程度早まった。白未熟粒の発生が懸念されたが、発生は軽微。斑点米カメムシ類(イネカメムシ)被害が懸念される。

3 技術対策

- (1) 登熟状況や気象状況に留意し、刈り遅れのないよう収穫を行う。適期の判定は、出穂期後の積算気温、帯緑色籾歩合、籾水分などにより総合的に行う。
- (2) 倒伏した場合は、速やかに排水し、成熟状況を見て早めに収穫する。収穫期に穂発芽等が認められる部分は可能な限り別収穫とし、品質低下を防止する。
- (3) 自脱型コンバインによる収穫作業は、籾の損傷軽減や作業能率向上のため、朝露が消えてから開始する。脱穀籾は含水量が高く変質しやすいので速やかに乾燥に移す。
- (4) 乾燥については、過乾燥・急速乾燥に留意して、乾燥機の毎時乾減率は0.8%以下とし、籾水分14.0～14.5%（玄米水分14.5～15.0%）に仕上げる。高水分籾の場合、急速乾燥は胴割粒を発生させるので、初期は通風のみで乾燥を行い、水分むらを解消してから穀温40℃以下の低温で乾燥を行う。さらに籾水分18%で一旦停止して半日程度貯留した後、再度乾燥を行うと胴割粒の発生をより抑制することができる。
- (5) 調製については、網目を1.8mm以上とし、整粒歩合80%以上を目標に仕上げる。選別機の処理能力以上の粗玄米を流さないよう丁寧に行い、整粒の確保を図る。丁寧な調製を行い、可能であれば色彩選別機を活用する。
- (6) イネ縞葉枯病対策および地球温暖化防止の観点から、収穫後は早めに耕起し、ひこばえを残さないようにするとともに、ワラの腐熟促進を図る。
- (7) 近年問題となっている種子伝染性病害（ばか苗病、いもち病、もみ枯細菌病等）対策として次のことを徹底する。

ア 種子更新と比重選の実施

自家採種種子や登熟不良種子は保菌リスクが高くなるため、種子更新と比重選を行う。

イ 資材消毒、種子消毒の適正な実施

化学農薬による種子消毒では、薬液温度に留意し（10℃以下にしない）、粃と薬液の容量比（1:1 以上）を守る。温湯消毒は微生物農薬との体系処理を行う。

ウ 作業場、育苗施設、本田周りの清掃

いもち病やばか苗病が発生したほ場の稲わら、粃がら、米ぬか等は感染源となるため、作業場、育苗や本田周りに放置しない。

エ 種子消毒・温湯消毒時、催芽～育苗時の温度管理の徹底

種子消毒や温湯消毒は適正な温度、時間で実施する。また、催芽、出芽時は 28℃を超えないようにし、育苗期も高温に注意する。

- (8) いもち病や紋枯病が多発する年次が多いため、本病が問題となっている地域では本病に高い効果のある箱施用剤を広域的に使用する。本田で発病が見られる場合は、早急に防除を行う。

- (9) 農薬等の使用状況の記帳確認を行う。

《参考資料》

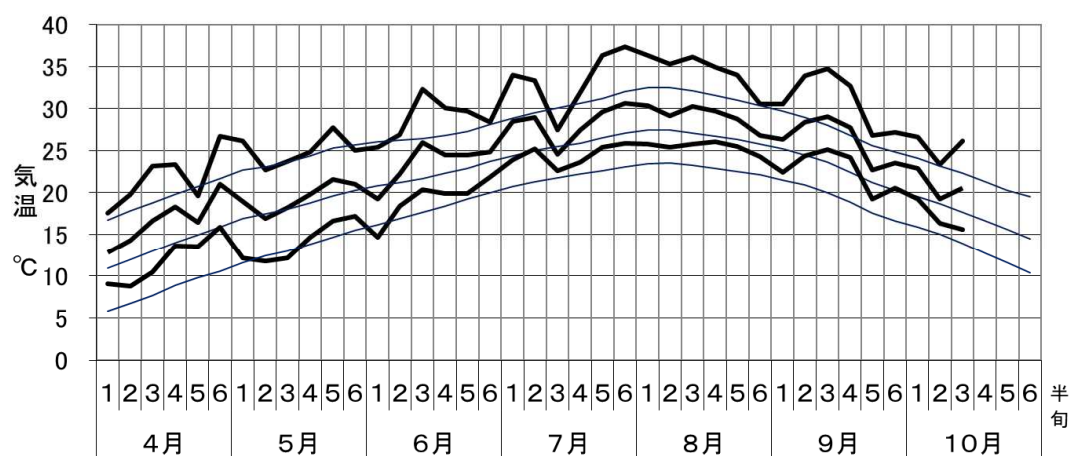


図1 気温

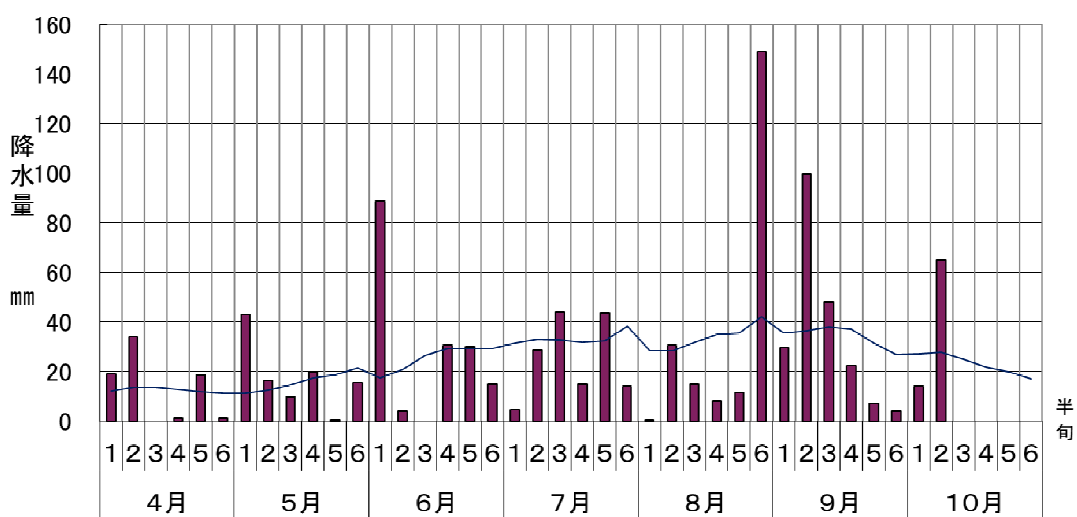


図2 降水量

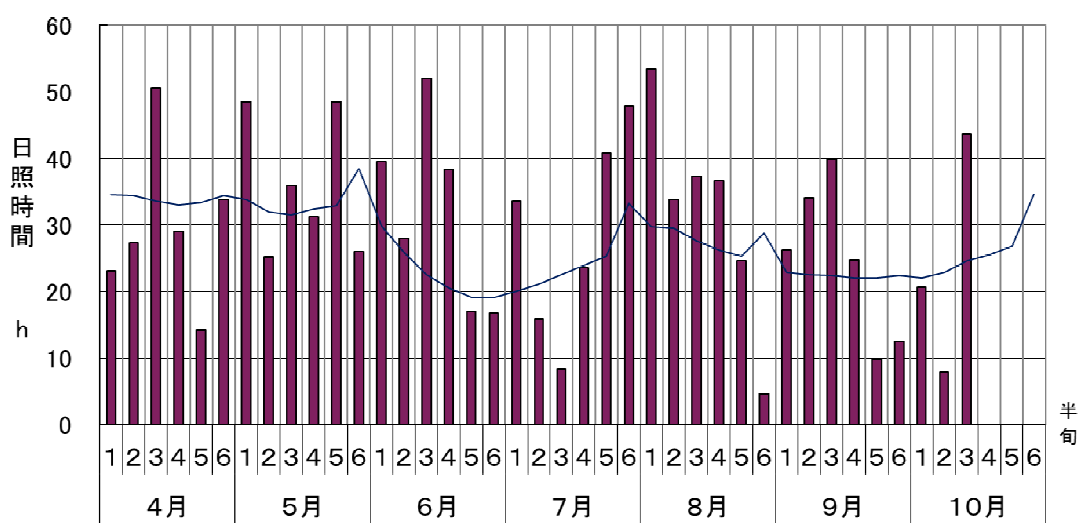


図3 日照時間